

記憶の一片を辿る

時代の証言者

6千石の生産を支えた社員

酒を造っていた当時の菊の露には、20人くらい住み込みで働いていました。丹波篠山から、酒造りの杜氏が anyone が来ていました。あ



元菊の露酒造(株)の子孫
田中 康之さん

◎プロフィール
たなか・やすゆき
三代目の故・田中之郎さんの
長男。菊の露の最盛期と衰退
を知る。御船地区。58歳

と地元農家の人も。蔵だけで従業員が20人、瓶詰めは10人、事務所に5人ほど居て大所帯でした。酒造りは冬場が忙しかったですね。今は冷房設備で酒造りが四季醸造できますが、昔の設備がないところは一回だけでした。酒の生産量は年間平均2千石で、最盛期は6千石造っていましたが、段々と減っていました。

二代目の祖父(正之さん)が社長をしていたころが最も最盛期で、昭和40年代まで続きました。そのころは酒が足りないほどでしたから、そこで酒造りを増産するための設備投資をしました。そのあと消費が落ち込み、経営が悪化していききました。菊の露が廃業したのは昭和56年ごろでした。

わたしの子どもが廃墟になった蔵の壁に近づく、父(之郎さん)がよく危ないと言っていました。壁が崩れるからと。ある日突然、蔵が「ガシャーン」と自然崩壊したことを覚えています。

酒造の町が歩んでいった繁栄と衰退の歴史。しかし、その歴史を知る証言者は数少ない。当時を知る人の話から記憶をさかのぼる――



元菊の露酒造(株)の社員で
御船の酒造伝統に詳しい

丹生 幸輔さん(御船)

白壁の土蔵は時代の要請

戦後の昭和20年、御船の造り酒屋は菊の露と、常薫の2軒だけでした。戦時中の企業整備で、国内の企業が整理統合で合併しました。それで御船の酒屋は、すべて菊の露に統合したので。

戦前までは、御船川の水と地元の米を使って酒を造り、舟便で川尻まで運んでいました。戦後には、オート三輪やトラックが普及して(舟便は)無くなりましたが。

酒造りは昭和28年まで、統制で余計に造れませんでした。その後、自由化されて、昭和30年代が一番多く

酒を造っていましたね。

菊の露の酒取引先は、今の御船町で40軒ほど。県下で2700軒の小売店があり、100軒ほどと取り引きしていました。

昭和40年前後になるとビールなど他の酒との競争も激しくなると、段々とビールに押され、酒は下降線をたどっていました。

白壁は、河川敷の改修でみんな無くなって、御船川沿いの景色が一新しました。これは仕方なかったでしょうね。水害を防ぐための措置でしたから。ですが、川沿いにあった白壁の土蔵と石垣は、時代の要請でしたよ。

白壁の鼓動が時を超えて

昭和58年8月、「板屋」の愛称で親しまれた上荒瀬の上田酒造の「白壁の酒蔵」は御船川河川工事で解体。さらに昭和60年3月、町文化財に指定されていた新橋上流の「白壁の酒蔵」も取り壊された。かくして、御船川沿いの「白壁」は完全に消滅した。

かつては、県下第一の「酒造りの町」として繁栄した御船。時代の波に次々と造り酒屋が倒れても、「白壁」の風情ある町並みは御船が誇れる自慢だった。

しかし、その町並みも今となっては見ることすらかなわない。そして、「白壁」の町並みを知る当時の人も年々少なくなっている。今まさに、真の意味で「白壁」が風化し、記憶の片隅からさえも忘れ去られようとしていた。

そんなとき、町民有志が立ち上がった。「もう一度、あの日本酒を復活させたい」との思いを胸に――。そしてついに、待ち望んだあの懐かしい香りと味が時代を超えて、この町に蘇ったのだった。

「水の鼓動」という名で――

特集・白壁(前編)終わり

〔参考文献〕御船町史、御船風土記、御船町歴史年表、人生寸描(丹生幸輔 著)

〔資料提供〕松永忠勝さん(写真集・白壁)、御船高等学校(御船高校八十年のあゆみ)

